

第 4 号議案 2009 年度活動計画

パルシック PARC Interpeoples' Cooperation

1. はじめに

地球上の各地で暮らす人びとが国民国家の壁を乗り越えて、直接的に助け合う世界をめざすパルシックは、同じ時代に共に生きる人間として、相互に支え合う道を、直接的かつ自然的な関係であると同時に人間的で対等な関係作りに参画する方法のひとつとして民際協力を行います。したがってパルシックは、第1に事業活動地域において人々の自立的で持続可能な暮らしと経済を成り立たせるような支援を行うこと、第2に、視野はグローバルかつナショナルにもちつつ事業地の状況をよく理解し、現地の人々との間に信頼関係を築きながら活動すること、そして第3に継続的に支援活動を行うことを民際協力の柱としています。

同時に、民際協力事業がその地域の人々の経済的な自立を支援するというとき、自己完結的な自給自足社会を想定するのは、これだけ密接にからみあった今日の世界において現実的ではないし、多くの食料を世界に依存している日本の私たちの現実を考えるとときに不遜でもあるかと考えます。したがって、経済自立支援において製品の市場を確保するということは、支援の出口として重要であると考えています。パルシックは、そのような民際協力の一部としてフェアトレードを位置づけています。「商品の生産、流通、消費などが、市場の価格だけを判断基準にするのではなく、人間的な交流と信用に基づく」という考え方に基づく直接的な交流、取引を重視するフェアトレードという活動です。

引き続き東ティモールとスリランカにおける民際協力活動を中心としていきますが、2009年度は、ちょっと無理をしないでいずれにおいても事業を拡大すると同時に、新しい地域での活動開始も模索します。

2008年度に新たな出発をしたパルシックは、今後の3年間で民際協力とフェアトレードを二本の柱とする組織の基礎をつくりあげます。不安定な今日の世界で、多くの市民の生命が危機にさらされるというような事態に、緊急調査団の派遣など、必要に応じて迅速に対応できるような基礎力を組織としてもてるようにするという含みもあります。そのためにフェアトレード事業を拡大すると同時に、協力者、支援者の裾野を広げることに、2009年度は力を注ぎます。具体的には、①賛助会員、サポーターズを

拡大すること、そのためにも②事業地、産地の背景情報の発信を充実させることを重点化していきたいと考えています。

2. 民際協力事業

民際協力事業としては、スリランカ、東ティモールそれぞれで従来の活動を継続する一方で、マレーシアで環境関連の新事業規模の開始を模索します。同時に組織としての調査能力を強化し、すくなくとも三つの事業地を含む国々に関する調査を可能な限り広く実施し、その成果をホームページなどで伝えていきます。

1) 東ティモール

独立後7年を経て、巨額の石油採掘収入の流入（2008年度活動報告参照）によって東ティモールの社会と経済の構造がどのような変容を遂げていくのかについて注目し、そのなかでどのような支援のあり方が有効なのかを考えながら従来の活動を一步広げます。

8年目に入るアイナロ県マウベシ郡でのコーヒー生産者協同組合の支援においては、組合の自立を進めるように一步退いた支援を心がける一方で新しい事業地に支援対象を広げ、かつ東ティモールにおける生産者協同組合の間の協力関係を進め、将来的には協同組合連合会へと発展するようなネットワークの形成に協力します。

地域のニーズとしては、水問題の解決、ソーラーパネルのような持続可能なエネルギーの導入、植林など数多くありますが、2009年度は次の課題を中心に活動します。

① マウベシ・コーヒー生産者支援事業

a) 組合中核の人材育成

2008年度から自立への一步を歩みだしたとはいえ、生産者協同組合の民主的な運営と経済事業体としての活動を実施していくというための人材育成はまだまだ不可欠ですし、諸問題の解決の中心となります。この人材育成を、①予算／決算や代表者会議、コーヒー集荷加工事業などの日々の活動の中で実施すると同時に、②他の類似の組合との交流、③政府協同

組合局と協力した研修事業やキャンペーンなどを通じて行います。

b) 組合の面的な拡大

マウベシ・コーヒー生産者協同組合（Cooperativa Agrikultura Moris Foun Unidade Kafe Nain Maubisse＝ココマウ）が財政的に自立するためには 60 トン以上の出荷、400 世帯くらいの組合員数が必要であるという活動開始当初の計画に基づいて、マウベシ郡内の新しい次の 3 つの集落——カヌレマ（Kanurema）、リティマ（Ritima）、ベトゥアラ（Betulala）にココマウの活動を広げます（表 1 参照）¹。

表 1 コカマウの組合員数の構成

村	集落	2008		2009		計	集落の総世帯数 (2004 統計)
		正組合員	準組合員	正組合員	準組合員		
アイトウト村	クロロ	25	16	25	16	41	49
	マウレフォ	26	8	26	8	34	37
	ベトゥアラ			5		5	97
マウベシ村	レボテロ	23		23		23	86
	リティマ			15		15	
	カヌレマ			18		18	
マネットウ村	ルスラウ	1		6		6	104
マウラウ村	リタ	38		38		38	126
	ルムルリ	33	21	33	21	54	67
	ハトゥカデ	25	6	25	6	31	78
組合参加世帯数		171	51	214	51	265	685

注 1：レボテロとリティマはおなじウルフオウ集落に属する
 注 2：アイナロ県マウベシ郡には、9 つの村（Suco）と 62 の集落（Aldeia）があり、集落が行政の最小単位。



c) コーヒー畑の改善と植林事業

コーヒーの木、シェードツリー（被陰樹）の苗床づくり、植付け、剪定、台切りなどによってコーヒーの畑の若返りを果たすことは、コーヒー農業の将来にわたる持続可能性にとって重要な課題です。およそ 3 年間の努力によってようやく組合員の間でもその必要性、有用性が理解されるようになってきており、2009 年度以降、この事業にいつそうの努力を傾注したいと考えています。

併せて、東ティモール全体にとって重要な植林という課題も、この地域でも水問題（水源の不足、雨期の川の洪水など）の解決などのために重要となっており、2009 年度は、植林活動への一歩として、組合に果樹の苗木の配布を実施します²。これは組合員の収入源の多様化を図る＝コーヒーだけに依存しない経済構造への支援でもあります。

¹ この新しい集落への展開はボランティア貯金の支援(509 万 9 千円)によって実施します。

² この事業の資金の一部はイオン財団によって支援されます(50 万円)。

② マウベシの女性グループによる食品加工支援

2008年度にマウベシの女性グループはソラマメ・チップスの加工で農林水産省と JICA の一村一品運動の候補商品として採択されたので、今後、同運動からマーケティング、生産機材などの支援が受けられることが期待されます。販路も広がっており、この活動を継続すると同時に、ジャム、コンポート、ハーブなどの新たな商品の可能性を実験します。とくにハーブ類は将来、コーヒー、紅茶につぐフェアトレード商品としての可能性を調査しながら進めます。

③ 新しい地域(エルメラ県エルメラ郡ポニララ村サココ集落)への拡大と生産者協同組合の連携支援

コーヒー生産が東ティモールでもっともさかんなエルメラ県の北西部山間地エルメラ県のポニララ村サココ集落は、ポルトガル時代にポルトガル人がコーヒー・プランテーションをつくっていたところで、当事のポルトガル人がロブスタ種のコーヒーを持ち込んだことから住民はロブスタ種のコーヒーを栽培しています。住民たちは、1999年インドネシアが去ったときに旧プランテーションの土地を占拠して自分たちで耕しました。この土地の所有権をめぐる争いをきっかけにして住民たちが、自分たちの生活を守る手段として協同組合を組織しています。ローカル NGO の KSI³ (Kudadalak Sulimutuk Institute) の支援を受けていますが、ロブスタ種のコーヒーをフェアトレードとして扱ってくれるところがないことからパルシックとの協力を求めています。2009年度、このロブスタ種の加工改善を支援します。

そして、このサココやマウベシの生産者協同組合を軸に、東ティモールのコーヒー生産者協同組合が相互に協力し合い、ネットワークを形成して、自立への歩みを進めるといふ新たな段階への支援を開始します。⁴

2) スリランカ

2009年度にはスリランカ政府軍による対LTTEの戦争がほぼ終結を見ることが予想されていますが、かつて LTTE 支配地域だったムラティブ周辺では、

政府軍と LTTE の間で激しい戦闘が続き、その地域



のタミール人住民は両勢力の間で板ばさみとなって生命の危機にさらされています。国連人権高等弁務官は3月13日、「2009年1月20日以来、(戦闘による砲撃で)2800人以上の市民が死亡し、7千人が負傷した可能性がある」、「15万~18万人の市民が戦闘地域に閉じこめられていると推計、死傷者の3分の2以上が、政府がLTTE支配地域内に設けた「(砲撃をしない)安全地帯」で出ている」、「戦闘が続けば、犠牲が破滅的になる恐れがある。紛争地域では食料や医療品も手に入らない」という声明を発表しましたが、この地域は依然として国際赤十字以外は立ち入り禁止となっていて、何もすべのない状況が続いています。ジャフナ半島および東部地域もこんごの状況は依然として不透明ですが、ジャフナ半島では少しずつではありますが、食糧事情なども落ち着きを取り戻しています。まだまだ不確定要因の多いスリランカ北東部では、以下の事業を計画しますが、同時に事態の変化を見守りながら柔軟に対応していきます。

³ 東ティモールの詩人が詠った「いくつもの小川が同じ方向に流れる」の意

⁴ この事業は JICA 草の根技術協力事業(パートナー型)として実施します。

① ジャフナにおける漁業再開支援：漁具配布と乾燥魚の活動へ

a) 漁具の提供

ジャフナの多くの漁村で内戦の再燃からおよそ 2 年間、漁業活動は著しく規制されてきました。沿岸 500 メートル以内やラグーンで細々と漁業を営んできました。少しずつ漁業規制が緩和されつつありますが、多くの漁民は、この 2 年間に洪水や、避難などで漁具を破損し、再開のための準備ができていません。そこでパルシックはジャフナで 2 番目に大きな漁村であるチャヴァカドゥ (Chavtkaddu) の漁民 500 世帯に、漁具を支給するプロジェクトを実施します。すでに調査、漁具の発注は 2008 年度に終わっています。配布する漁網は、ジャフナ市内の工場で作られるものです⁵。

表 2 漁具支援の対象漁村と世帯数

郡名	村名	世帯数
サンディリパイ Sandilipay	チャヴァッカドゥ	274

b) ヤギと養鶏プロジェクト

2006 年 8 月に閉鎖された国道 A9 号線は 2009 年 2 月に軍部に対しては開通され、政府の手になる物資の配達を開始されました。しかしながら、民間人による物資の輸送が自由になるまでには未だ数ヶ月を要すると思われます。したがって、2007 年に開始した漁村女性のための養鶏事業も継続します。また一部の地域では養鶏ばかりでは卵の価格低下に対応できないという女性たちの声に応じて、子ヤギを配布し、ヤギの飼育を支援します⁶。

⁵ この事業の実施経費の 2008 年度にスイス開発公社から 414 万ルピーの支援を受けています。

⁶ この事業の実施経費は 2008 年度にスイス開発公社から約 600 万ルピーの支援を受けています。

c) 乾燥魚プロジェクト

2003 年にパルシック (旧名 PARC) がジャフナでの事業開始を決断したとき、内戦による破壊の著しいジャフナの沿岸地帯で、氷も手に入らないし、大規模市場へのアクセスも不自由な漁民たち、とくに女性が収入を持続的に得るために、乾燥魚の加工と販売を支援することを決定しました。その後、研修などを経て、ジャフナに適した乾燥魚の作り方を確立したときに、津波、そして内戦の再燃という条件のなかで中断せざるをえませんでした。内戦が終結に向かい、漁業が再開できる条件が整い次第、当初計画していた乾燥魚プロジェクトを再開します。

表 3 養鶏とやぎ飼育の対象漁村と世帯数

郡名	DS Divisions	村名	参加世帯数
ウドウヴィル	Uduvil	マルサナルマダン	15
カライナーガル	Karainagar	プリヤマナル	18
カライナーガル	Karainagar	マルサブラム	12
コパイ	Kopay	プトゥール	25
サンディリパイ	Sandilipay	ウイヤラブラム	12
サンディリパイ	Sandilipay	クラヴァディ	18
サンディリパイ	Sandilipay	チャヴァカドゥ	10
チャヴァカッチェリ	Chavakachcheri	プリヤマヴェディ	30
チャンカニ	Chankani	アラリ・センター	13
チャンカニ	Chankani	アラリ・サウス	17
テリパライ	Tellipalai	イラヴァライ	20
カライナーガル	Karainagar	カライナーガル	14
カライナーガル	Karainagar	カライナーガル	11
コパイ	Kopay	プトゥール-アヴァランガイ	16
サンディリパイ	Sandilipay	ウイヤラブラム-アナイッコダイ	3
サンディリパイ	Sandilipay	クーラヴァディ-マニパイ	16

注: はやぎ飼育の世帯とその漁村

② 東部州での復興支援事業の開始

2006 年—2007 年の内戦再燃に際して、戦場となったトリンコマリ県の南側の地域、ムトゥール地方を 2008 年 4 月に調査をいたしました。とくにタミール人集落の破壊が著しく、学校からヒन्दウー寺院、住宅が破壊されていました。学校は部分的に破壊しているところが多かったので、とりあえず、復

興支援のひとつとしてムトゥールの学校の再建を支援します⁷。

③ 紅茶園で働く女性たちとの交流と支援

フェアトレード商品であるウバ紅茶の産地、ウバ州ハプタレ県のグリーンフィールド農園の女性たちの生活および農園内の循環農業に関する調査を行って、今後、どのような支援を行っていくのが適切かを判断します。

3) 新しい事業地の展開：マレーシア、ペナンの漁民支援

パルシックは人と人とのつながりのなかから、ともに支えあって、より良い世界のために貢献するような民際協力を目指しています。そして姉妹組織のPARCとして行ってきた「水産資源保護」の調査研究の中でマレーシアの漁民組織に出会いました。

観光地として名高い一方で工業化と住宅開発が進むマレーシアのペナン州では沿岸水域の汚染によって沿岸漁民の生計が困難になる一方で観光地としてもその美しい海岸の魅力を失いつつあります。PIFWA（ペナン浅海漁民福祉協会）という漁民団体は沿岸水産資源の復活をめざしてマングローブの植林を開始しています。さらに川沿いのハッチェリーで手長エビの稚魚を育成し、放流して持続可能な漁業を目指しています。日本ではすでに多くの漁業協同組合が実施している事業ですが、途上国の漁民団体が主体的に取り組んでいるのは珍しい事例ですが、資金的に困難であると同時に、稚魚育成やマングローブの苗床作りに関しては技術的な支援を必要としています。

パルシックは資金の見通しがついた時点で5カ年くらいの計画でPIFWAの支援を行ないたいと考えます。同時にPIFWAの活動を広くマレーシア国内そして日本社会に知らせ、漁業者やNGO、都市住民たちの間に環境保全と持続可能な漁業に関する問題意識を高める活動を行い、クアラルンプールや日本の青年がマングローブ植林に参加するようなツアーを組みます。この活動は、東ティモールやスリランカの場合と異なり、3年—5年の支援によって、撤退でき、その後は交流だけを継続するという展望で取り組む計画です。2009年度はまずこの活動のための

資金を確保することを行います。

3. フェアトレード事業

2008年度はパッケージ作成などの助走作業に終わり、2009年度から本格的にフェアトレードの事業活動に取り組みます。パルシックの活動に共感してくださり、こちらからもメッセージなどをお伝えすることのできる直接購入のお客様を大事にして、一歩ずつ拡大していくと同時に、まとまった数量を扱ってくださる生協、食材店などへの卸売りの拡大にも積極的に取り組みます。

1) カフェティモール

前記のようにマウベシや他の地域のコーヒー生産者の生活改善と自立支援のためには、今までにも増して多くのコーヒーを日本の消費者に購入していただくようにしなければなりません。まず東ティモールの農民に共感をもってください個人、団体の方々に確実にお届けするとともに、このコーヒー豆を愛好してくださるコーヒー焙煎業者、食の安全に関心をもつ食材店や消費者生協、レストランなどに安定的な販路を確立することを目指します、美味しいコーヒーとともに生産者の声を伝えて、従来のカフェティモールの粉と豆のパッケージに加えて、ドリッパック、夏のリキッドコーヒーを発売開始します。

2) ウバ紅茶

2008年度半ばにスタートした美味しい、有機栽培によるウバ紅茶を広く知らせ、パルシックのフェアトレード商品として定着させます。

3) ハーブ類の商品化

コーヒー、紅茶に続けて、東ティモールの女性支援の一環としてハーブの商品化に着手します。2009年中に、輸入・販売までこぎつけられるかは未だ不明です。

⁷ この事業の実施経費は国際ボランティア貯金寄附金によって538万8千円の支援を受けています。

4. 広報および国内事業

2008年度は立ち上げの多忙さのなかで広報に充分に取り組むことができませんでした。2009年度は協力者や支援者を拡大すること、そしてフェアトレード商品の知名度を高めていくような広報に力をいれていきます。

1) ホームページによる情報発信の強化

東ティモールやスリランカの地域の情報をしっかり伝えていくホームページへと深めると同時に、フェアトレード商品のカフェ・ティモールやウバ紅茶を扱っているショップの紹介や美味しいコーヒーの飲み方の紹介など親しみやすいホームページという側面をもって、フェアトレード商品の販売にもつながるようにします。

2) 各種メディアによる広報への働きかけを模索する。

新聞や各種雑誌、テレビなどへの情報提供を行い、東ティモールやスリランカの人々の状況が日本の市民に伝わるような努力を行います。

3) 現地訪問スタディー・ツアーの開催

東ティモールのコーヒー生産者を訪ねる旅、スリランカの紅茶園を訪ねる旅、さらには安全上、可能になれば、ジャフナへの訪問を継続的に実施し、日本の市民が直接、コーヒー生産者あるいは紅茶園の女性労働者、あるいはジャフナの漁民と親しく交流する機会を積極的につくっていきます。

4) 民際協力講座および各種報告会の実施

2008年度に実施したパルシツク的な民際協力事業の調査、実施、評価などの方法論を学ぶ集中講座を継続して実施する（8月予定）とともに、チャンスをつかえて小規模でも、事業報告会や東ティモール、スリランカの状況を考える学習会や討論会を各地で重ねていきます。併せてウバ紅茶の理解者、支援者を増やし、パルシツク自身も紅茶に関する知識を増やすために、姉妹組織 PARC の自由学校のなかに紅茶コースを設けます。

5) 東ティモール住民投票から10年目のコンサート

そして、2009年は東ティモールの住民投票およびその後の流血の惨事から10年目を迎え、同時にパルシツク（当事 PARC）としての東ティモールでの活動を開始してから10年に当たることを記念して、コンサートを開き、改めて多くの人に東ティモールに関心を寄せていただく契機としていきます。東ティモールで民衆の声を歌で表現し続けており、自然農法の実践者でもある東ティモールの歌手エゴ・レモス（バンド名：シンコ・ド・オリエンテ Cinco do Oriente）を招いて、1999年9月にインドネシア軍と民兵によって殺された人々を痛み、あれから10年の歩みを振り返るコンサートを実施します。

日時 9月5日土曜日

場所 都内

5. サポーターズ、賛助会員の拡大を目指す

とくに法人に賛助会員になっていただくように働きかけを開始すると同時に、コンサートやホームページを通じたメッセージ、情報の提供によって多くの方にサポーターとなつていただけるようにメッセージを工夫します。

パルシツクとしては会員、サポーターの方々に活動に積極的に参加していただくひとつの方法として、カフェ・ティモールやウバ紅茶の販売員になっていただくということを提案します。カフェ・ティモールやウバ紅茶について、まず知って頂き、周りに広めていただくということをお願いします。